

# 30V-am08

ビタミンD 栄養指標である血中 25-Hydroxyvitamin D 濃度と血圧の関係

○津川 尚子<sup>1</sup>, 白木 正孝<sup>2</sup>, 内野 由理<sup>1</sup>, 岡野 登志夫<sup>1</sup> (<sup>1</sup>神戸薬大, <sup>2</sup>成人病診療研)

**【目的】** ビタミンDはカルシウム代謝調節作用のみならず、心臓・血管機能に関与する可能性が示唆されている。ビタミンD 栄養を最もよく反映する指標である 25-hydroxyvitamin D (25-D)の血中濃度は血中副甲状腺ホルモン (PTH) 濃度や骨密度に影響することが知られているが、欧米を中心とした疫学研究から心血管系死亡率に関連することも報告されている。また、ビタミンD 受容体遺伝子欠損マウスの研究では、ビタミンD がレニン-アンジオテンシン系の負の調節因子として働く可能性が示唆されている。そこで今回、ビタミンD と血圧の関係を調べる目的で、日本人高齢女性の血中 25-D 濃度と血圧について解析を行った。**【方法】** 日本人高齢女性 (平均年齢 65.7 歳) 211 名を対象に、既存高血圧症、収縮期・拡張期血圧と年齢、血中 25-D、PTH 濃度との関係をロジスティック回帰分析法で解析し、血中 25-D 濃度 20 ng/mL をカットオフ値とした高 25-D 群と低 25-D 群の血圧を比較した。**【結果】** 血中 25-D 濃度と高血圧有病率には負の相関関係がみられた。また、低 25-D 群の血圧は高 25-D 群に比べて有意に高かった。血圧は、年齢および血中 PTH 濃度と有意な正相関関係を示したことから、これらを予測因子として重回帰分析を行った結果、年齢と血中 25-D 濃度は血圧に対する独立影響因子であることが確認された。高血圧治療薬である Ca 拮抗薬、アンジオテンシン II 受容体拮抗薬を服用する対象者においても、血中 25-D 濃度の低下は血圧上昇の要因になることを確認した。**【結論】** 日本人高齢女性の血圧と血中 25-D 濃度には有意な負相関関係があり、血中 25-D 濃度が年齢や血中 PTH 濃度とは独立して血圧に影響する可能性が高いことが示唆された。